

〈 2. 特集 行く・読む 〉

中国の「ごみ村」で生きる人々

金 太宇

中国において都市の空間的拡大により、周辺の農村部が蚕食されていくなかで、都市と農村の二元混合体のような地域が次々と生み出されるようになった。農村でもない、都市でもないこうした地域（以下、「第三空間」とする）では、従来の伝統的農村社会の存立基盤が崩壊し、住民の混住化が急速に進んできている。そして、「第三空間」において、廃品回収にかかわる中国特有の社会集団である「拾荒人」<sup>1</sup>や「回収人」<sup>2</sup>などが居住する「ごみ村」（写真3、写真4）が数多く存在している。農村出身者が多数を占める「拾荒人」や「回収人」の活動は生活のためとはいえ、その活動により多くのごみが再利用され、それはごみの最終処分量の減量にもつながっている。ところが、「回収人」や「拾荒人」がごみの再資源化に大きく貢献してきたにもかかわらず、彼／彼女らの活動に対する社会的評価は依然として極めて低い。

本稿では、こうした人々が回収業に参入した経緯と現に置かれた生活状況を、フィールドワークでの所見と中国社会の人口移動の歴史を振りかえりつつ、呈示していく。



写真1 金属探知機で廃品を探し出す「拾荒人」



写真2 廃品を運ぶ「回収人」

中国社会では1958年の「戸籍制度」をもとに、都市-農村の「二元的社会構造」を形成し、市民を「農業人口」と「非農業人口」とに二分した。そのうえで、「農業人口」の都市部への移動を厳しく制限してきたのである。こうした人口移動を阻害する「壁」である

<sup>1</sup> 「拾荒人」（スファンレン）とは、廃棄されたごみの中から廃品を拾い、それを換金することによって生活を営んでいる人々を指す言葉である。

<sup>2</sup> 「回収人」（フィソウレン）とは、街中を徘徊しながら廃品を買い取る人々を指す言葉である。

「戸籍制度」は、1978年の改革開放政策の導入で大きな転期を迎えるに至る。改革開放政策の導入以後、農村経済体制改革の進行と「生産請負制」の実施に伴い、農村の余剰労働力の存在が顕在化してきた。

1992年春、鄧小平の「南巡講話」をきっかけに、中国の沿海地域と都市部の経済改革が加速し、農村から都市への出稼ぎ労働者の移動が爆発的に増加した。出稼ぎ労働者は新たに「農民工」と呼称され、都市の経済発展の重要な役割を担う存在となった。高収入を求めて流入した「農民工」は、不平等で差別的な身分から、都市住民と同様の生活様式と平等な生存権を望み「壁」を越える存在へと変わってきたのである（王 2004：208）。

ただし地元での農業生産より高収入を期待できるとしても、「農民工」のほとんどは都市住民が忌避する「3K」労働に従事するケースが多く、とりわけ豊かな都市部では新たな貧困層という存在にすぎない。また、農村から絶えず流入する「労働力」によって、またたく間に都市の労働市場は供給過剰となり、「農民工」が安定した職業に就くのはけっして簡単なことではなかった。そのため、「農民工」は安定した職を手に入れようと、農村から都市、都市から都市へと転々と移動しながら生活せざるを得なくなった。都市へ流入してきた「農民工」は、都市経済の発展に大きく寄与したにもかかわらず、都市行政や政府は「農民工」への保護や福祉サービスをほとんど提供することはなかった。都市の人手不足を解消するための「労働力」として「農民工」を認める一方、都市住民と同等の権利を認めなかったのである。



写真3 「ごみ村」での生活空間



写真4 「ごみ村」の一角

こうして「農民工」は、公共サービス／福祉サービスを受けない、「自己責任」にもとづく都市生活を強いられるようになった。こうした「農民工」のうちの一部は、「ごみ」を介して自己の「生」を反転しようとしたのである。

また、「農民工」が廃品回収に携わることができるようになったのは、回収業の構造的変化と深い関係がある。計画経済の時代における廃品の回収・分別業務は政府の管轄下であり、集団所有の回収企業従業員（公務員）がその主たる担い手であった。しかし、改革開放の流れのなかで、集団所有の回収企業の組織体制が徐々に弱体化し、ついに1984年から民間企

業や個人による回収業への参入が認められるようになった。政府に完全統御されてきた回収業者は、未成熟な市場に参入することとなり、組織の管理・監督が行き渡らなくなる。こうした行政の管理の隙間を縫うようにして、「農民工」が積極的に入り込み、回収業の重要な担い手となっていく。

「農民工」が回収業に積極的に加わる原因は、他業界と比べ比較的参入のハードルが低く、しかも現金で高収入を得るチャンスがあるからである。回収業は特別な技能を持たず、「農民工」にとって、格好の職業の選択であった。そして1990年代からの経済発展の加速と消費増加につれて、都市の資源ごみの排出量も増え続けるようになっていく。それによって、「農民工」の廃品回収への参入が活発になり、巨大な廃品回収のネットワークが作り上げられていったのである。

彼／彼女らは市街地を廻りながら都市住民から直接に廃品を買い取ったり、居住地や商業施設の周縁や都市周辺のごみ山などから資源ごみを拾い集めたりして、それを換金することで生計を立ててきた。しかし、回収業に投じたとしても、「農民工」の生活の改善が保証されるわけではない。廃品回収を通じて富を手に入れるのは、ごく一部の「農民工」に限られており、多くの「農民工」は相変わらず苦しい生活を強いられている。さらに、「回収人」、「拾荒人」は、たび重なる都市住民からの差別や行政からの活動制限を受け、生活の基盤は常に不安定である。「回収人」、「拾荒人」のなかには、都市での職が定まらず、仕方なく回収業に転じ、次の仕事が見つかるまでの間の生活資金を廃品回収から獲得し、転職に備えている人も決して少なくない。こうしたことから、回収業は「農民工」の生活維持のための「緩衝地帯」としての役割を果たしていると考えられる。

ごみ村で出会ったW氏（1955年生まれ）のこを上げてみよう（写真1）。W氏はもともと河北省の農村で暮らしていたが、村の一人当たりの農地は僅か平均0.7畝（約6.67アール）しかなく、貧しい生活を送ってきた。1990年代ごろ、商品経済が農村へ浸透し、徐々に農業だけでは生活の維持が難しくなった。1998年ごろから、W氏は妻と一人息子を農村に残し、同郷人と一緒に都会へ出向き、建設の工事現場で働き始めるようになった。それから7年間も各地の工事現場を転々とし、必死に働きながら定期的に家族に仕送りを続けた。コツコツと貯めたお金で、農村に家を新築し、あと数年働いてから帰郷する予定であった。

ところが、成人したばかりの息子が突然の難病で倒れ、生活の状況は一変した。息子の病気を治すために、親戚や友人から多額の借金を背負い、最後は家も農地も手放さざるを得なくなった。息子の一命は取りとめたものの、重い後遺症が残り、両足で立ち上がることができなくなってしまった。家も農地も失った一家は、農村を離れることを余儀なくされた。しばらくの間は工事現場での仕事を続けてきたが、年を取るにつれ体力が衰え、雇ってくれるところもなくなってしまった。

それから、2007年にごみ村に住居を借り、「拾荒人」として生きるようになった。W氏は、妻とともにごみ山の周辺や立ち退きを迫られた村の跡地などで廃品を集めてきた。しかし、

収集できる廃品の量が限られており、収入は極めて少なかった。2010年に知り合いの同郷人から中古の金属探知機を購入してからは、ごみのなかから効率よく金属を探し出すことができ、廃品の収集量が増えるようになったという。

仮に「拾荒人」や「回収人」の活動がなかった場合、大量の資源ごみは利用されずに地下に眠ったままであろう。こう考えれば、いままでの彼／彼女らの活動は、廃棄物処理の欠陥を補ってきたともいえる。しかし、これまでの「拾荒人」や「回収人」の活動は評価されず、彼／彼女らは度々行政管理の排除の対象となり、生活が不安定な状況に置かれてきた。こうした不利な状況のなかで、「拾荒人」や「回収人」は、「第三空間」で粘り強く自らの生を織り成している。中国においては、都市と農村、都市住民と農民の格差構造がいつこうに改善されず、農村で生きる人々がなかなか構造化された貧困から抜け出せない現実がある。廃品回収の仕事は、都市社会に進出した農民が自らを社会から完全に離脱させないように、次へのステップアップを図るための「踊り場」なのである。

写真の撮影地：中国瀋陽市

#### [参考文献]

王文亮, 2004, 『九億農民の福祉——現代中国の差別と貧困』中国書店.